

感覚と直観によつてこの世との関係を宙に示す

——川端康成『雪国』について——

セリンジャー（朝さろん）

朝さろんの本棚〈64〉…2017年1月15日（日）

〈名作から／について、考える〉

1 名作から／について、考える

《「名作」と呼ばれる作品たちを、既成の評価をいったん脇において、ゆつくりと堪能してみよう。「哲学的な」対話」と
「（詩的想像力による）読み」と「（文学的な）レクチャー」を一体的にしたのしむ読書会が《朝さろん》です。一冊の作品だけで「ここまで考えられるんだ」という清新な沃野へ、いっしょにピクニックに出かけましょう。とはいえ、あまり堅苦しくならず、小説を読む愉楽に浸りながら、なによりもまず楽しい読書会にしたいと考えています。

2 物語のアウトライン

本作『雪国』について、竹西寛子氏は《俗悪なものにも、高貴なものにも、透明な目で無差別の熱烈な交わりをつづけながら、あらゆるものから離れて立ち、しかもあらゆる物を精力的に容認するといふこの世の愛し方》（文庫解説より、以下同）を指摘し、《『雪国』と『伊豆の踊子』を分つ一点を、「美しい空虚な気持」に加えられた「美しい徒勞」の自覚の介入》に見ている。竹西氏によればこの「美しい徒勞」とは、《決して満たされない、というよりも満たされてはなら

朝さろん 64th morning
〈名作から／について、考える〉
『雪国』川端康成

ない存在への恋を、即物的にも、抽象的にも、また夢幻的にも表現し得る感覚の力は、この『雪国』において、多様性をもってまず確率された」と指摘され、それは《存在への恋》と呼ぶようなものであるという。竹西氏によって繰り返し言及される《存在への恋》や「美しい徒勞」について、本文の表現を丁寧に見解しながら鑑賞してみたい。そのためにもまず、本作のアウトラインを確認してみたい。

《アウトライン》 ある年の十二月初め、島村は雪国に向かう汽車の中で、病人の男に付き添う恋人らしき若い娘（葉子）に興味を惹かれる。島村が降りた駅で、その二人も降りた。旅館に着いた島村は、芸者の駒子を呼んでもらい、朝まで過す。

島村が駒子に出会ったのは去年の新緑の五月、山歩きをした後、初めての温泉場を訪れた時のことであった。芸者の手が足りないため、島村の部屋にお酌に来たのが、三味線と踊り見習いの二十歳の駒子であった。次の日、島村が女を世話するよう頼むと駒子は断ったが、夜になると酔った駒子が部屋にやってきて、二人は一夜を共にしたのだった（以上、回想）。駒子はその後もなく芸者になっていた。昼、冬の温泉町を散歩中、島村は駒子に誘われ、彼女の住んでいる踊の師匠の家の屋根裏部屋に行った。昨晚車内で見かけた病人は、師匠の息子・行男で、付添っていた葉子は駒子と知り合いらしかった。行男は腸結核で長くない命のため帰郷したという。島村は按摩から、駒子は行男の許婚で、治療費のため芸者に出たのだと、聞かされるが、駒子は否定した。

島村は温泉宿に滞在中、毎晩駒子と過ごし、独習したという三味線の音に感動を覚えた。島村が帰る日、行男が危篤だと葉子が報せに来るが、駒子は死ぬところを見たくないと言い、そのまま島村を駅まで見送った。

翌々年の秋、島村は再び温泉宿を訪れた。去年の〇月に来る約束を破ったと駒子は島村をなじる。その後、行男は亡くなり、師匠も亡くなったと聞き、島村は嫌がる駒子と墓参りに行った。墓地には葉子がいた。

駒子はお座敷の合間、毎日島村の部屋に通ってきた。忙しいあゝる晩、駒子は葉子に伝言を持って来させた。島村は葉子と言葉を交わし、魅力を覚えた。東京に行くつもりは葉子は、島村が帰るときに連れて行ってくれと頼み、「駒ちゃんをよくしてあげて下さい」と言った。葉子は死んだ行男をまだ愛しているようだった。「駒ちゃんは私が気がいいになると言うんです」と葉子は泣きながら言った。葉子が帰った後、島村はお座敷の終った駒子を置屋（駄菓子屋の〇階に間借り）まで送ったが、駒子は再び島村と旅館に戻り、酒を飲む。島村が「いい女だ」と言うと、その言葉を誤解し怒った駒子は、激しく泣いた。

島村は東京の妻子を忘れたように、その冬も温泉場に逗留を続けた。天の河のよく見える夜、映画の上映会場になっていた繭倉（兼芝居小屋）が火事になり、島村と駒子は駆けつけた。人垣が見守る中、一人の女が繭倉の〇階から落ちた。落ちた女が葉子だと判った瞬間にはもう、地上でかすかに痙攣し動かなくなった。駒子は駆け寄り

二階 葉子を抱きしめた。駒子は自分の犠牲か刑罰かを抱いているように、島村には見えた。駒子は「この子、気がちがうわ。気がちがうわ」と叫んだ。

駒子に別れて帰ろうとする時、村の活動写真小屋が火事になった。島村が

3 小説的な背景

《梗概》

無為徒食の島村は、雪国に旅し、芸者駒子と知り合った。

彼女は誰に見せるあてもない日記を付け、読書ノートを綴り、三味線の独習をしている。《徒勞》じゃないかと島村が言うと、駒子は徒勞ですわと答えて平然としている。しかし、もう一度徒勞だと叩きつけようとしたとき、島村は何かに打たれ、駒子の《純粹》さがしみわたるように思った。彼女は師匠の息子行男が病気になる時、療養費を稼ぐため芸者に出たという噂もある。しかし彼女は行男とのことははじめを付け、行男に近づくことはしない。葉子という娘がいて、彼女は駒子の残る思いを代弁するかのように、行男の看病をし、行男が死んだ後はその墓参りをする。駒子の島村への思いはただならぬものになったが、駒子は東京の家族の元に帰る島村を追っていけない立場にある。そうなった時、葉子が駒子の代弁をするかのように、島村に、自分を東京へ連れて行けと言ったりする。島村が駒子に別れて帰ろうとする時、村の活動写真小屋が火事になった。

自分の《犠牲か刑罰》を抱いているように見えた。天を巻く天の川が島村に落ちかかるようだった。

《解説》

戦中は、戦争協力するのでない限り、文学など徒勞のわざと思わないわけにはいかないと場所があった。島村は、そういう当時の知識人達の思いを託されて登場している。「雪国」の前半は、生きる意義を見いだせず、無意味な生を送っていると思わざるを得ない男が、女の生きる力に触発され、何とか再生の道を進む話である。

後半は、愛しても報われぬような愛の存在価値が問題になっている。なまじっかな愛などあればあるほど、別れはつらい。では、愛などなかった方がよかったのか。いやそうではあるまい。そういう思いが、天の川などに託されて表現されている。『新研究資料現代日本文学』第1巻より）

伊藤整は本作の視点人物である島村について、《島村は決して情人とか女好きという存在ではなく、美しく鋭いものの感覚的な秤りである。そして、この島村が女と触れ合うところに発する火花。それが、この作品のあらゆる行にせわしなく息づまるように盛られている実体である》（文庫解説より、以下同）。それゆえ《駒子のような、悲しいまでに真剣な存在、それよりもっと危険な怖ろしいほど張りつめた生き方しか出来ぬような葉子のような存在のない所では、島村は空しい無に帰してしまふ》と端的に指摘している。伊藤整によるならば島村は《その感覚する「美」の一点においてしか生活していない》ということであり、《いつかその島村の生き方の限界が駒子

『雪国』川端康成

中学時代、『藤村詩集』は康成の愛読書だった。長田幹彦や武者小路実篤の小説も読んだ。藤村や幹彦は、川端の旅情を養い、実篤は理想主義を養った。漱石や芥川のエゴイズムの文学にはむしろ批判的で、志賀直哉、泉鏡花らの文学を高く評価する傾向があった。しかし特定の人につくというのではなく、広く内外の書を読破し、そこから独自のものを作り上げていこうとした。ダダイズム、表現主義、横光の映画的手法、岡田三郎が紹介したコント等は、川端が写実的手法を脱却し新感覚派的表現を探り出す上で影響力を持った。仏典、聖書、エジプトの死者の書、心霊学書等にも目を通し、自己の死生観をうち立てようと努力した。昭和五、六年前後には、モダニズム文学の典型「浅草紅団」を発表し、転じて「水晶幻想」などでは、ジョイス流の意識の流れの手法を試みた。戦中は「源氏物語」や中世文人の文章に親しみ、戦後の「山の音」「千羽鶴」などには、源氏、能、和歌、俳句などとの関連も指摘できる。一方、「みづうみ」「眠れる美女」「片腕」等は、同時代の前衛的手法や性の文学とつながっている。（『新研究資料現代日本文学』第1巻より）

に理解され、駒子を絶望に陥れる〴〵さまを、物哀しさと美しさをもつて描き出すことこそが、『雪国』の白眉であるということになる。

4 川端の文学的影響関係

昭和四十七年、七十二歳の川端康成はひとり死を選んだ。そのあと、追悼特集の編まれた雑誌の一つに、評論家河上徹太郎が「川端康成対横光利一」と題する文章を書いている。「対」にはコントラとルビがふられており、このコントラは対比であって同時に対をなす一対を意味するように思われる。横光利一と川端康成とは昭和の文学を考えるとき、欠くことをえない、そして切り離すことのできない一対とみられるのである。

この「川端康成コントラ横光利一」には昭和二十二年、横光が数えどし五十で亡くなったとき、その棺の前で川端が読んだ「横光利一弔辞」が多様に引用されている。「横光君」という呼びかけで始まる弔辞の初めのところには、「君を敬慕し哀惜する人々は、君のなきがらを前にして、僕に長生きせよと言う」ともある。じっさい、川端康成はそれから二十五年、「長生き」したのであった。

また、この弔辞には、

君の名に傍えて僕の名を呼ばれる習わしも、かえりみればす
でに二十五年を越えた。君の作家生涯のほとんど最初から最後
まで続いた。その年月、君は常に僕の心の無二の友人であったば
かりでなく、菊池さんと共に僕の二人の恩人であった。

5 横光利一と川端康成

『雪国』川端康成

という一節も出てくる。このごろでは川端康成、横光利一という順序で呼ばれるのが「習わし」となっているが、以前は横光、川端と呼ばれたのである。二十五年、「長生き」したことで川端康成の評価は横光利一を越えたとも考えられる。横光の「作家生涯のほとんど最初から最後まで」にあたる「二十五年を越えた」歳月に、ほぼ見合う二十五年を川端は横光の没後に生きたことになる。

この弔辞の一節に出てくる「菊池さん」とは菊池寛のこと、横光と川端とは菊池寛の家で引き合わされたのだった。大正十年（一九二一）のことで、ここから「二十五年を越えた」、「無二の友人」関係が始まったのだった。川端はそのときのことを回想して、「横光氏が先に帰ると、あれはえらい男だから友達になれと、菊池氏が言った」と書いている。横光が二十三歳、川端が二十二歳の年である。菊池寛、川端康成、横光利一、この三人の関係も昭和の文学を振り返るときに見落とすことができない。

菊池寛は大正十二年に『文芸春秋』を創刊したが、この雑誌が初めて小説を載せるようになったとき（同年五月号）、そこに横光の作として発表されたのが「蠅」である（川端も「会葬の名人」を掲載）。そして同時に『新小説』に「日輪」が発表された。これも菊池寛が世話をして掲載をみた作である。「日輪」と「蠅」と、この二作が同時に発表されたことで、横光は文壇に登場したのだった。菊池寛は横光にとっても「恩人」であった。横光の第一作品集とみられる『御身』（大正十三年）には「菊池師に捧ぐ」と献辞がある。

横光、川端が菊池寛のもとから巣立った「一对」の作家であった。

大正十三年、十余人の同人とともに発刊した『文芸時代』での「新感覚派」としての活動で、この二人はいよいよ緊密な僚友関係を深めたのである。しかしこの二人の小説の作風には対照的なところがあつて、それは『文芸時代』の大正十五年一月号に同時に載った川端の「伊豆の踊子」と横光の「ナポレオンと田虫」とを読み合わせてみると一目瞭然だろう。川端の抒情性と横光の着想性とは、きわめて端的に対比されるのである。また、横光の「蠅」などと川端の初期の「掌の小説」とを読み合わせると、どこか形の上で類似するものも認められるのであるが。（保昌正夫「横光利一・人と作品」、『昭和文学全集第5巻』より）

6 近代日本文学に描かれた多様な《愛》と《美》のあり様

冒頭の竹西氏の解説にもう一度目を戻したい。私見によればと断つた上で竹西氏は『川端康成の文学における日本については、本来モノローグによる自己充足や解放を好まず、ダイアローグによってドラマを進展させたり飛躍させたりする谷崎潤一郎の文学と較べてみると、少なくとも一つのこととははっきりするよう思う。それは谷崎文学が、日本の物語の直系であるようには、川端文学はドラマの欠如あるいは不必要によって直系とはいい難く、本質的にはモノローグに拠るものという点で、和歌により強く繋がっている』とそ

『雪国』川端康成

の特質を挙げ、この文学は、ゆめ論述志の文学ではなく、感覚と直観によってこの世との関係を宙に示している」と考察を進めている（文庫解説より）。川端を読み解く中から、日本近代文学に流れる二つの水脈を敏感に察知している。それは谷崎と川端によって探求された、異なる《愛》と《美》のあり様を再発見することでもある。

『雪国』については、平井裕香氏によってさらに次のような指摘もされている。（本作の）地の文は、女を性的或は美的な対象の位置に押し込める一方で、自己を唯一の主体として特権化しようとする欲望を作中人物・島村と共有しながら、このホモソーシャルな共犯関係を「島村」という二人称の符牒により隠蔽する。そのような志向性を持つ語り手・島村の言葉に対して〈他者の言葉〉としてあると言える駒子・葉子の台詞は、地の文の言表行為の主体と主たる言表の主体たる島村の特異な関係ゆえに、語られる物語と語ることばの水準の差異を越えて地の文を逆照射する。二つの異質なコード・文脈の間でことばがふるえるとき、そしてそのふるえがテキストの他の位置にある同一語を介してテキスト全体に及ぶとき、語り手・島村のコード・文脈の偏向及びその背後にある志向性が露になる。『雪国』というテキストは、〈他者の言葉〉がこのように語りを脱臼させる過程をこそ提示している（「ふるえることば、脱臼する語り」。こうした視座から、名作とされる作品を今日的に読み直し、更新していく試みは絶えず行われている。

改めて、今シーズンは川端康成の『雪国』をはじめとして、三島由紀夫の『美徳のよろめき』、そして谷崎潤一郎の『春琴抄』を取り上

げる。いずれもその作家を代表する作品であり、日本近代文学のなかでも名作と呼ばれる作品である。『雪国』が〈俗悪なものにも、高貴なものにも、透明な目で無差別の熱烈な交わりをつづけながら、あらゆる物から離れて立ち、しかもあらゆる物を精神的に容認するというこの世の愛し方〉（竹西寛子）を示す作品であり、〈決して満たされない、というよりも満たされてはならない存在への恋を、即物的にも、抽象的にも、また夢幻的にも表現し得る感覚の力〉（同）を示している点で名作とされると仮に考えたとき、『美徳のよろめき』や『春琴抄』もまた、それぞれに固有の特色を結実することで名作となりえていることが容易に想像できる。三作品がそれぞれに、男女間の愛情や恋愛の機微を濃密に描き出すのと同時に、作家それぞれの固有の探求法に基づく《愛》や《美意識》が描き出されている。日本近代の名作に触れながら、三作品を通じて、名作が表現してきた日本的な《愛》と《美》のヴァリアントも鑑賞していきたい。



【あらすじ】

無為徒食の男、島村は、駒子に会うために雪国の温泉場を再訪した。駒子はいいなすけと噂される好きでもない男の療養費のために芸者をしている。初夏の一夜以来、久々に会えた島村に駒子は一途な情熱を注ぐが、島村にとって駒子はあくまで芸者。島村は雪国への汽車で会った女、葉子にも興味を抱いていて…。「無為の孤独」を非情に守る男と、男に思いを寄せる女の純情。人生の悲哀を描いた著者中期の代表作。

※初出※ 昭和十年一月〜昭和二十二年十月にかけて『文芸春秋』『改造』等に断続発表。初刊：昭和十二年六月創元社刊。完結版：昭和二十三年十二月創元社刊。定本版：昭和四十六年八月牧羊社刊。

【著者プロフィール】

(1899年(明治32年)6月14日 - 1972年(昭和47年)4月16日) 日本の小説家、文芸評論家。大正から昭和の戦前・戦後にかけて活躍した近現代日本文学の代表的作家の一人。大阪府出身。東京帝国大学国文学科卒業。

大学時代に菊池寛に認められ文芸時評などで頭角を現した後、横光利一らと共に同人誌『文藝時代』を創刊。西欧の前衛文学を取り入れた新しい感覚の文学を志し「新感覚派」の作家として注目され、詩的、抒情的作品、浅草物、心霊・神秘的な作品、少女小説など様々な手

法や作風の変遷を見せた。その後は、死や流転のうちに「日本の美」

を表現した作品、連歌と前衛が融合した作品など、伝統美、魔界、幽玄、妖美な世界観を確立させ、人間の醜や悪も、非情や孤独も絶望も知り尽くした上で、美や愛への転換を探索した数々の日本文学史に燦然とかがやく名作を遺した。日本人として初のノーベル文学賞も受賞し、受賞講演で日本人の死生観や美意識を世界に紹介した。

1934年(昭和9年)9月には初めて新潟県の越後湯沢(南魚沼郡湯沢町)に旅し、その後も再訪して高半旅館の16歳の芸者・松栄(本名・小高キク)に会った。これをきっかけに、のちに『雪国』となる連作の執筆に取りかかった。1972年(昭和47年)4月16日夜、72歳でガス自殺した(なお、遺書はなかった)。

参加者：8名
進行：芹沢

【会の記録】感想や意見

感想／疑問点

- ・再読した。当時よくわからなかった。その「わからない」というところが嫌だった。今回の再読でも理解したというにはほど遠いが、話し合いを通じて何かが深まったらうれしい。
- ・比喩表現が独特である一方、意味をとらえるのが難しく感じられるものが多いように感じた。
- ・二十年振りに再読した感銘を受けた。哀しくて美しい精神性は現代にも通じると思う。一方、「いい子だよ」の意味がどんなものがよくわからなかった。
- ・旅先で芸者にあうところが『伊豆の踊子』みたいだと思った。本作が名作であるのが何故なのか、それがよくわからなかった。最初の一文は有名だが、なにか特別すばらしいとされる理由があるのか。
- ・肝心なところが省略され、スカされ、ボカされている印象。時代や場所の特定も省略されている点など。それが逆に効果的に感じるが、そうした省略はどんな意図／効果を上げているのか。
- ・タイトルはよく知っていたが、読んだのは初めてだった。駒子の発言や行動がすぐ二転三転するところ（帰ると言って帰らないところなど）が特に印象に残っている。その間に駒子の中で何が起きているのかなと思ひ、駒子の思考に想像が膨らんだ。
- ・小説の冒頭で、駒子を一番覚えてるのが島村の左手の人差し指という描写があり、なぜかと思った。川端康成が左手の人差し指に

した理由はなにか。

- ・駒子が島村に望んでいることはなんなのか。妾になることではないように思った。愛されることだとすれば、どんな愛され方を考えていたのか。物語世界では愛とはどういうものとされているか。
- ・「天の河」のくだりをどう解釈するか。名作に通じるのはどんな部分か。

・美しいなと思った。色の多さ、色彩感覚、五感を刺激し、またフルに使っている感じ。どう読んだらよいか解釈が困る箇所が少なかった。

- ・初読時は男尊女卑的な印象を受けたが、再読時は「いいな」と実感した。自然イメージと人物イメージの重なり合いが、この作者ならではの良さを表しているように感じた。冬に読むのに適している。
- ・蛾を殺すシーンの冷徹で乾いた視線、世界（自然、生死）を等価にまなざす視線が印象に残った。葉子の死（？）にはどんな意味がこめられているのか。

意見／読解

- ・島村が抱える空虚さと、駒子が示す徒労がおたがいに否応なく響き合いつつ、けれど一般的な幸福を形作らない様子には不憫さ（？）も覚えるが、一方で、なにか美しさというか「良さ」を感じた。
- ・時代背景を踏まえて読んでも、さらに島村の女性を対等視しないような、どこか軽薄に取り扱うような振る舞いが感じられ、一概に

肯定できないようにも感じるがどうか。

・ 一体全体、駒子はなぜそこまで島村に惹かれるのか。文学趣味や「徒労」に象徴されるような要素を読み込んで、決定的なものとは感じられなかった。五年越しの連れや行男という存在もあり、それぞれとなんらかの交情を持ちつつも、なぜ島村が決定打となっているのか。

・ 葉子という女の存在が不気味だった。行男に人生を捧げており、彼の死を以て看護婦という将来も幕を下ろし、人生にさしたる希望も持ち得ていないように見える。行男への想いが一般的な恋愛感情というよりも献身的犠牲的な愛情に見え、二人の関係が何なのかがわからなかった。

・ 島村と駒子の二人の恋愛の成就を決定的に阻んでいるものが何か、わからなかった。

・ 葉子は島村を東京へ行くきっかけにしようとしているだけと感じたが、それが葉子なりの（年季が明けず温泉地を離れられない）駒子への当てつけであるのか、その可能性がどの程度あるのか。この辺りがいま一つわからなかった。

・ 駒子はいわば職業婦人で、どこでも身を立てられるが故に「自由に恋愛を謳歌できる」と自認していて、まさに実行しているようにも見えるが、しかし島村との縁は刹那的なものとして終わる。対して葉子はそうした技能を持たない女であるが、しかしだからこそ一人の男の傍に最期まで留まり続けられる可能性を有するようにも読める。日参の墓参りを欠かさない葉子は死してもなお行男の影の中に

生きているとも言えるが、墓参りをせず絶縁を貫く駒子には自由が齎される一方で常に孤独でいるようにも思える。こうした駒子と葉子のコントラストが複層的で興味深く思えた。

・ 島村の葉子への興味関心は、駒子へのそれのような性的・恋愛的なレベルには達していないのではないのか。もっと別のなにかを象徴するような、興味関心ではないのか。この点で、駒子と葉子それぞれへの関心部分は重ならず、単なる浮気心などとは違うものが描かれているように思えた。

・ 非常に官能的な小説だと思う。「官能性やエロス」という要素と《美》がどんな風に関係しあっているのか特に気になる。何か独特で密接な、作家に固有の世界が広がっているようにも思える。

発展

◆ 本書が名作に相応しい作品だと仮定して、本書が投げかける本書ならではの「テーマ」とはいったいなにか。そのテーマを「くく？」という問いのカタチにしてみる。

↓ 「然と共に生きる人々の逞しさや美しさ。「その根底にあるものは何か？」

↓ 「美しさを表現するために「雪国」はどんな工夫をしているか？」

↓ 「美しい日本の私、とは何か？」

↓ 「真善美に対する」《美》至上主義とは何か？」「美しさとは？」

↓ 「美と静謐さとの関係とは？」